弁護士の働き方とメンタルヘルス

弁護士・社会福祉士
浦﨑寛泰 Hiroyasu Urazaki
精神保健福祉士・社会福祉士
佐藤香奈子 Kanako Sato

Ⅰ　事例編

とある60代のベテラン弁護士（以下「弁」）と、独立型事務所を経営するベテランのソーシャルワーカー（以下「SW」）が、ある若手弁護士のことについて話し合っています。

1　仕事が忙しすぎる若手弁護士

弁　今日は事件対応のことではなく、私の事務所の若手弁護士―ここではA弁護士としておきましょう―のことについて、お知恵をお借りしたいと思っています。

SW　先生の事務所は、確か5人くらい弁護士さんがおられましたよね。

弁　はい。一応私が代表ということになっていますが、私も含めて4人が「パートナー」（共同経営者）として経費を出しあって事務所を運営しています。ほかに、最近採用した新人の勤務弁護士が1人います。A弁護士は、パートナーの1人です。新人のときからうちで働いてくれていて、3年ほど勤務弁護士として働いたあと、2年くらい前にパートナーになりました。彼は、当事務所のパートナーのなかでは一番の若手ですが、仕事熱心で能力も高く、いろいろなところに顔を出して、自分で顧問先を開拓したりしています。また、企業案件だけではなく、国選事件や法律扶助事件もいくつも担当しています。弁護士会の会務活動にも熱心で、刑事弁護関連の委員会では部会長を任されているようです。

SW　大変優秀な先生でいらっしゃるのですね。何かお困りなのですか？

弁　それが、奥さんとの関係がうまくいっていないようなのです。仕事が忙しいのもあるとは思いますが、事務所で寝泊まりをして、家にもあまり帰っていないようです。お酒の量が増えてきているようにもみえます。

SW　ご本人はそのことについて何か話されていますか？

弁　子育てのことで奥さんに不満を持たれている、というような話をしていました。A弁護士には1歳のお子さんがいるのですが、奥さんも大きな会社で働いていて、数か月前にお子さんを保育園に預けて、仕事に復帰したそうです。ただ、夫婦とも地方出身でご両親が近くにおらず、奥さんの子育ての負担が大きいようなのです。

SW　A先生は、奥さんに負担がかかっていることについては何とおっしゃっているのですか。

弁　はっきりとは言っていませんが、仕事について奥さんの理解が得られないと愚痴をこぼしていたことがあります。A弁護士は、以前は、刑事弁護の接見のために、夜おそくに遠方の警察署を何カ所も回るような仕事ぶりでした。た